

# 語彙力と会話力の相関関係について

梶原秀夫

## 0. はじめに

人間と動物の違いは言語による伝達 (communication) ができるか否かにある。動物にも言語があると主張される方もいるかもしれないが、筆者の言う言語とは単なる鳴き声による意味の伝達ではなく、分節音 (articulation) による記号化 (= 意味化) が可能な言語のことである。このことはちょうど水を見たときに単なる透き通った液体にしか見えないのが、その液体の構造は化学式が  $H_2O$  と表されるように、水素が2個に対して酸素が1個の構造をなしているのと同じである。人が水を飲むときには、<sup>(1)</sup>喉が渴いたり薬を飲んだりするための必然的な場面 (situation) または脈絡 (context) が存在し、特別に水素や酸素を飲んでいるという意識はない。言語も同じで、それが音声化したときにはすでに場面や脈絡が存在し、音素 (phoneme) や形態素 (morpheme) を発話 (utter) しているなどという意識はしないものである。

動物の鳴き声にはこのような分節音 (articulation) が存在しないため、その音声は構造化することができず、多種の意味を有する語彙 (= 記号) へと進化することが不可能である。動物たちの鳴き声は、危険や餌のある場所を知らせるための抑揚 (intonation) はあるかもしれないが、それも限られた場面の状態を伝達する意味化がなされるだけで、それ以上の発展性は望めない。宇宙のことに思いを馳せると何から何まで不思議であるが、人間の脳細胞がこのような言語音声認識するまでに進化してきたことに驚きを覚える。

特に言語が音素 (phoneme) と形態素 (morpheme) に分節されることは、つまり**言語の二重分節 (double articulation) <sup>(2)</sup>**が可能であるということは、人間が動物的状态からより人間的状态へと脳細胞および調音器官 (articulatory organ) が進化したことを意味している。ある一つの対象物 (object) に名前 (= 記号) が付けられた瞬間にすでに動物的状态から人間的状态への進化が始まっていて、その物や事の名前 (= 記号) はその瞬間の場面で意味化された単語 (word) <sup>(3)</sup>、すなわち語彙 (vocabulary) の一部分となり、その記号化方式は無限に言語を生産 (generate) していくのである。ちょうど動物たちが聴覚や嗅覚や超短波的な知覚作用ができるのと同じく、人間は言語を媒介としてあらゆる知覚作用を行っているとも言えよう。言語

が言語を生み出すということは、知識が知識を生み出していくことと同じである。科学の進歩がそのいい例である。豊富な語彙 (rich vocabulary) を持つことは、それだけ豊富な知識を獲得したことになる。

この二重分節 (double articulation) という言語方式は、極端な言い方をすれば、宇宙エネルギーの一つであり、人間という生命体を媒体として、地球を起点にして太陽系の範囲内で活動を活発化させ、しまいには銀河系の範囲から無限なる宇宙へとその活動範囲を無限に拡大していく動力源なのかもしれない。なぜ人間だけがこのような知覚機能を持つようになったかは、まさに宇宙の神秘であって、われわれ人間には永遠に未知のものであろう。

言語の本質を追究すると結局は「人間とは何か」の問題になり、時には哲学的な説明が必要とされたりして、言語起源論の学会が中止になってしまったように、「超」がつくほど難しくかつ厄介な問題なのである。しかしその本質に絶えず迫るようにしないと、言語教育の方法論 (methodology) という点で正鵠を射ていない教授論が氾濫してしまう結果になる。言語教育という、やはりきちんとした理論が根底にあって、その理論はそれを基にした方法論の試行錯誤によって絶えず検証されねばならない。

語彙教育の重要性についてはすでに紀要論文の梶原 (2000)<sup>(4)</sup> でかなり詳しく論じているが、今回の本論文では語彙力とはどういうことなのか、語彙力と会話力とはどこが違うのか、また両者の相関関係はどうなのか、などについて論じてみたい。当然のこととして言語の本質、語彙レベルの問題、用語の確認などをきちんとその都度確認していくことを許されたい。

## 1. 語彙力とは

まず初めに人間の言語獲得 (language acquisition) について再び触れさせていただくことにする。言語獲得というと、どうしてもチョムスキー (Chomsky) の「言語生得説」 (innateness hypothesis) から論じないと事が始まらない。なぜなら言語生得説は「統語論」 (syntax) の分野で議論 (discuss) されるべきものなのか、それとも「語彙論」 (lexicology/lexis) も含めて論じるべきものなのか、あるいは「場面」 (situation) の伴う語彙認識はまったく関与されないのか、されないとするなら「場面」に対する認識過程は経験的あるいは後天的なものなのか、などの諸問題が生ずるからである。

### 1.1 言語獲得問題

筆者は梶原 (2001)<sup>(5)</sup> でも触れているように、人間は生まれながらにして言語知覚機能を脳細胞に組み込んでいると信じる一人で、その意味でチョムスキーの言語生得説 (innateness hypothesis) を容認する立場にいる。ある個別言語のデータを幼児が与えられると、生得的な言語機能が作用してその個別言語を獲得する。これはその個別言語の文法を理解したことにもなる。たしかに言葉の上での表現はそのようになるかもしれない。

しかしここで重要な問題が生じてしまっているのを読者諸氏はお気づきであろうか。つまり**個別文法を理解する**ということは**一体どんなことなのか**、という問題である。筆者はこの問題に焦点を当ててこれまでにあれこれと主張させていただいている。筆者の論文はその都度用語の定義などと言って、読者諸氏を食傷気味にさせてしまっているが、一つの事柄について議論 (discuss) する場合、相互に使用する用語の概念が同じでないと、いつまでたっても論点がかみ合わなくなってしまう。この言語獲得という場合も同じで、幼児が個別文法を理解できるのは、生得的に文法能力を、つまり普遍文法 (universal grammar)<sup>(6)</sup> と称する言語機能を脳細胞に組み込まれて生まれてきているからである、と短絡的な分析をしてしまいがちである。このことは言い換えるならば、認識という階段の一段目を踏まないですぐに二段目から踏み始めてしまうということで、最初からすでに間違った認識過程を踏んでしまっていることを指摘したのである。

**その生得的な言語機能とは果たして統語的なものなのか、それとも語彙レベルのものなのか、と疑念を抱くことから始めていただきたい。**筆者はこの統語的な認識過程に入る前に、理論的にもこのような分析が正しいと確信しているのであるが、「物には名前がある」(Everything has a name.) と言語獲得の本質を三重苦のヘレン・ケラー女史が彼女の自叙伝で述べているように**記号認識機能が先ず働かないと統語的構造への言語認識はできるはずがない**、という認識論である。

## 1. 2 認識過程の重要性

この第一段階の認識過程を踏まないと、つまり用語の定義と同じように、このところでの認識を一致させないと、そのあとの分析が多様になって相互の理解に時間と労力がかかってしまうのである。現状はまさに悪い面の結果が出過ぎていて、文法論や教授論などで千差万別の正鵠を射ていない分析論が横行していて、困った問題だと筆者はやり切れない思いでいる昨今である。これまでに何度も例に挙げて恐縮であるが、「文 (Sentence) とは何か」と問われてあらゆる辞書を引いてみれば容易に理解できるように、その説明あるいは定義は千差万別である。「水の化学式は水素2と酸素1の H<sub>2</sub>O である」などというように、世界中で一致した定義が未だになされていないため、相互に議論し合う場合もそれぞれが異なった概念を持ちながら、つまり根本的な第一段階の認識過程がないままに、少しずつ本論から外れた枝葉の論議が進められていくのが現状である。このことは日頃の会議などでもよく見られる光景である。執拗に例を列挙して申し訳ないが、政治の面で言えば、どこかの国の国粋主義者が「聖域なき改革」などと表現すると、政官財の癒着した社会の腐敗構造を改革してくれるものと多くの国民は期待感に胸をふくらませてしまう。ところがそれは言葉の綾であって、その実はとんでもない危険な思想が秘められている言葉なのである。国粋主義者の用いる「聖域」という語は、本来は「神の域」の意味であるが、戦前・戦中は天皇そのものが神であると教育されていた。つまり「天皇の域」である。それが戦後民主化されてその聖域は「憲法の域」を意味している。この

根本的な意味を認識していないと、政官財の癒着構造を改革し不景気を一掃してくれるのでは、と多くの国民は錯覚してしまうのである。言葉で大衆を扇動し、独裁者へのし上がって行ったドイツ国のヒトラーの例を見れば一目瞭然である。つまり言論の自由は束縛され、情報公開は後退し、自衛隊はいつのまにか有事立法で国民の主権を勝手に踏みにじって、国の内外に向かって戦前の軍隊のごとくこれも勝手に出動することがいつの間にか可能になり、その「聖域なき改革」がまさに「憲法の改悪」を本質的に目的としていることに国民の多くは未だに気づいていないのである。政官財の腐りきった癒着構造を改革するのは当たり前前の政治活動であり、絶対に「聖域なき改革」の意味範疇には入っていない改革である。誰がどうこの「聖域なき改革」という意味をはき違えたのか、未だに経済構造や政官癒着の改革だと誤解しているのには憤りさえ覚えてくる。とんでもない間違いである。筆者がことさらにこの問題に紙面を割いている理由をぜひ再認識していただきたい。物事を論じていく際に非常に重要な問題なのである。特に言語による認識は、語彙認識が、つまり各単語（常に文の中で一つの語彙の意味機能と文法機能を有している）の概念（＝意味）をきちんと認識することから物事を発展させないと悲劇が生ずると言っても過言ではない。そこで言語獲得の問題に話題を戻したい。

### 1. 3 記号知覚装置の優位性

因みに筆者は梶原（2000）で提示しているように、その生得的な知覚機能を「記号知覚装置」（sign perception device=SPD）と称してチョムスキーの「言語獲得装置」（language acquisition device=LAD）と対立させている。言語機能の生得性を指摘したチョムスキーの考察力には敬服の一言である。彼の言語生得説（innateness hypothesis）は、まさに人間とは何かの哲学であり、単にこれまでの構造主義（structuralism）の帰納的認識論（inductive epistemology）に対する演繹的（deductive）思考方法であると分析するだけでなく、もっと意味深長な人間そのものの認識論なのである。

すでに述べてきたように最初の段階で間違った見方をしてしまうと、その後の認識過程に余分な判断が付加されてしまい、終いには本質とは全くかけ離れた結論が導き出されてしまう。この現象は非常に恐ろしいもので、人間社会で絶えず起きている問題でもあり、戦争が繰り返されているのも、その本質にこのような言語認識の大きな問題があるのかもしれない。宗教の争いがまさに然りで、「神」の定義が一致していないが故の絶えざる争いなのである。とにかく人間が最初に踏む認識段階はどのようなものなのか、それは後天的なものなのか、それとも先天的なものなのか、この一番重要な認識問題が未だに統一されていないのである。それをただ単に生得的（innate）だという認識で具体論の世界に入り込んでしまうと、正鵠を射ていないさまざまな方法論が出現し、いつまでたっても混乱した状態が続いてしまいがちである。

言語生得説（innateness hypothesis）と同時に使われた用語は世界の言語に共通する「普遍文法」（universal grammar）であって、この認識論はすぐに教授論（methodology）という点で演繹的な見方をするようになり、さらに言語教育は特に外国語を学ぶ場合は母国語と外国

語の文法の違いから教えるべきであると短絡的に考えた教授法が唱えられるようになる。つまり統語的レベルの知覚機能が生得的であるという最初の認識過程から必然的に生ずる結果なのである。筆者はこの点に警告を発しているのである。

やはり言語獲得 (language acquisition) の第一段階は、すでに述べたように「物には名前がある」(Everything has a name.) という知覚能力の有無であろう。人間にはこの能力が備わっているが、他の動物にはそれが欠けている。それを筆者は「記号知覚装置」(sign perception device=SPD) と称していることもすでに述べているが、このSPDが生得的に人間の脳細胞に備わっていることは理論上明確なことである。このSPDが作動しないとどんな治療を施しても言語の獲得は不可能である。人間の姿をしていても言語が全く理解できなければおそらく動物以下の行動を余儀なくされるであろう。何かの身体的な障害で耳が聞こえなくても視覚的に手話や口唇術で言語を理解することができる。三重苦のヘレン・ケラー女史は指文字 (manual alphabet) によって言語獲得を可能にしている。それもこれもこのSPDが作動したからこそその言語獲得 (language acquisition) である。

#### 1.4 SPDと語彙 (=記号) の相関関係

これほど執拗にSPDの問題に紙面を割いているのは、本論文の論題に大きく関係しているからである。言語習得 (language learning) には何がどう作用してそれ自体を可能にしているのかが重要である。母国語以外に外国語をその国に留学したりしなくても流暢に話せるようになった人は世の中に多く存在する。あるいは留学してもなかなか流暢に会話できない人も存在する。その原因はどこにあるのだろうか。

この問題の本質には上記のSPDが大きく関係していることを筆者は主張したいのである。しかも重要なことはSPDの作動には必ず場面 (situation) が伴っているということである。なぜなら言語伝達は意味の伝達以外の何ものでもないからである。記号と意味は切っても切り離せない関係にある。記号認識はすなわち意味認識である。「意味」(meaning)<sup>(7)</sup> という用語にもここで触れておくと、梶原 (1992) で詳しく考察しているように「意味」には「語彙レベルの意味」と「談話レベルの意味」がある。前者は辞書的な意味で後者は場面を伴った意味のことである。

しかしここで重要なことは、前者の辞書的 (=語彙的) 意味も、本来は場面を伴った環境で記号として誕生している考察 (observation) である。このような分析方法の根底には執拗に主張を重ねている記号知覚装置 (SPD) の認識方法がある。構造主義的な言語分析法でしかも言語学の生みの親とも言われるソシュール (Saussure)<sup>(8)</sup> の記号 (sign) の恣意性 (arbitrariness) とその価値 (value) の問題も、その根底には「意味」(meaning) の生ずる場面 (situation) という環境問題が絶えず存在しているのである。言語記号の命名 (name) が恣意的 (arbitrary) であるのは事実であるが、勝手に記号 (sign) が誕生するわけではなく、必ずその記号が必要な場面 (situation) があって意味化されるのである。また言語記号の価

値 (value) という場合も、記号相互間で必然的にそれぞれに規制し合ってそれぞれの意味が決められていく、つまりそれも意味化するための場面が必ず設定されての話なのである。

あれこれといくつかの用語を提示しながら話を進めてきているが、筆者が何を言わんとしているのかと思われているかもしれないので、これまでの論旨をここで収斂もしくは方向づけしていくことにしたい。

つまり言語記号である語彙 (vocabulary) を考察 (observe) するには、<sup>ま</sup>まず言語記号がどいう認識過程で生起するのかを、言語獲得 (language acquisition) という観点でそれを明確にする必要があるということである。その言語認識の最初の段階で必要な用語が筆者の仮説 (hypothesis) でもある **記号知覚装置 (SPD)** と称する語である。さらにその記号知覚装置 (SPD) が作動するには必ず場面 (situation) という言語環境が必要であり、そこには常に「意味」(meaning) という言語伝達の核 (core) となる用語がある。人間と動物の差はこの SPD が作動するかしないかであって、しかもこの SPD はヘレン・ケラー女史が井戸小屋 (well house) で次々と周囲の物に<sup>さわ</sup>触ってはその名前 (name) を<sup>たず</sup>尋ねたように、必ず質問という反応が伴っていることである。テレビなどで時々ゴリラやチンパンジーを幼児から育てて、指文字 (manual alphabet) で日常の生活を表現させたら、感情表現までするようになったなどと報じているのを見たことがあるが、それらは単なる条件反射的に訓練された行動であって、「質問」いう「反応」が絶えず備わっている SPD が作動したものではない。「これは何ですか」などという反応を示した動物はどこにも存在しないのである。

そこでこの言語誕生の本質が何を意味しているのかと言え、**言語教育には絶えず場面の設定が必要であり、その場面の中で学習者は「意味」(meaning) を生起させる記号構造への質問意欲を常に持っている。つまり語彙教育の中心にはいかに語彙力 (rich vocabulary) をつけるかの問題が常に存在していて、そのための教材研究や教育環境の創意工夫が絶えず求められている**ということである。教材研究の重要性を改めて強調したい。筆者の勤務する大学では全学生に2年間にわたって合計4回の Vocabulary Test を実施している。問題の80%は改良を長年重ねてきている Vocabulary Handbook (2000語の会話文で、TOEIC の Part2 形式にしてある) という教本から出題し、20%は応用問題で英語誌『Time』などから出題している。2年ほど前からこの教材を使用するようになったら、なんと800点以上の高得点者が10倍以上に増え、全学生の平均点も驚くほどに高くなっている。試験日が近づいてくると、キャンパス内のあちこちや駅構内などでも教本を開いて勉強している学生たちの姿が、最近非常に多くなってきている。Vocabulary Test 委員会の責任者としてこれほど嬉しいことはない。現在はさらに教本をウォークマンやコンピューターを使用して学習できるように CD-ROM の作成に時間と労力を注いでいる。さらに ELF (English Language Foundation) という教科目は、上記の Vocabulary Test と同じく TOEIC テストも受けることを必修としている。学園と多くの教員や職員の協力があることは言うまでもない。

それでは語彙力 (rich vocabulary) と会話力 (speaking ability) はどのように位置づける

べきであろうか。また両者の相関関係はどう具体的に語学教育に活かされるべきであろうか。これらの問題に話題を移すことにする。

## 2. 語彙力と会話力の関係とは

この問題は語学教育にとって非常に重要なことである。この両者の相関関係をきちんと認識していないと、枝葉の語学訓練ばかりが先走ってなかなか実用的な会話力が身に付かない結果を余儀なくされてしまう。語彙力 (rich vocabulary) をつけるとは、ただ単に単純語を暗記することではなく、成句としての語の場面 (situation) や脈絡 (context) と一致させた教授方法が大切である。この「場面」という語の意味は非常に幅が広く、ホテル、レストラン、銀行、郵便局、病院、デパート、教室、薬局、公衆電話、歌舞伎座などでの単なる「場所」での発話環境を指すだけでなく、さらに語構成上の「統語的な文法による脈絡」もやはり場面という環境作りをしていると言える。何を言っているのか分かりにくいと思うので具体的な例をできるだけ提示してご理解を仰ぎたい。

### 2.1 場所的発話場面

日常の会話で重要な語彙は、各自が訪れる場所での会話表現である。それぞれの場所で必要な語彙はそれほど多いものではない。おそらく10個以内の語彙で用が足りてしまうだろう。会話表現そのものを大きな語彙の固まりと思ってそのまま何度も音読訓練させることが大切である。日本語を言われたらさっと英語で応答する訓練、またその反対に英語で言われたら即座に日本語で応答する訓練、Writing の授業も書くだけでなく音声による応答練習を同時に課することが重要である。ミニテスト (quiz) も音声でやれば簡単であるし、書き取り (dictation) でもいいし、毎回一問だけのテストならば writing でもチェックはそれほど苦痛ではない。とにかくいかに多くの語彙 (vocabulary) を「場面」を通じて覚えさせるかが大切なのである。特にこの「場所」を示すことによる語彙訓練は、日常会話の本質なので学習者が一番興味を持ちやすい面があり、「今日は銀行の練習をしよう！」と声をかけるだけですぐに教師が何をしようとしているかが理解され次々と出される質問に喜んで応答するようになる。

#### 場所的発話場面の設定

##### 場面1 (ホテル) :

「今夜シングルの部屋を予約したいのですが…」

“I'd like to **reserve** a single room for tonight.”

「あいにく満員でございます」

“I'm sorry we're **full up**, sir.”

場面 2 (レストラン) :

「本日のお薦め品は何ですか」

“What’s Today’s **Special**?”

「ご注文はおきまりですか」

“Are you ready to **order**, sir?”

場面 3 (銀行) :

「100ドルをくずしたいのですが…」

“I’d like to **change** a 100-dollar bill.”

「預金をしたいのですが…」

“I’d like to make a **deposit**.”

場面 4 (郵便局) :

「これを書留にしたいのですが…」

“I’d like to have this **registered**.”

「これを速達にしたいのですが…」

“I’d like to send this by **special delivery**.”

場面 5 (病院) :

「外来の受付はどこでしょうか」

“Where is the **reception desk for out-patients**?”

「健康保険証をお見せいただけますか」

“Could you show me your **health insurance certificate**?”

場面 6 (デパート) :

「贈り物用商品券はどこで購入できますか」

“Where can I get **gift coupons**?”

「包装はリボンをつけてくださいますか」

“Could you **wrap** it with a ribbon?”

場面 7 (教室) :

「きょうは皆さんにたくさん配布資料がありますよ」

“I’m going to give you a lot of **handouts** today.”

「来週の金曜日までに提出してくださいね」

“Please **hand in** them by next Friday, okay?”

場面 8 (薬局) :

「この処方箋をこちらでやっていただけますか」

“Could you make up this **prescription** here?”

「不眠症にかかっているんです」

“I’m suffering from **insomnia**.”

#### 場面9 (公衆電話) :

「ニューヨークへ長距離電話をかけたいのですが」

“I'd like to make a **long-distance call** to New York.”

「つながるのにどのくらいかかりますか」

“How long will it take to **put me through**?”

#### 場面10 (歌舞伎座)

「前売り券を2枚購入してありますから、また来ましょうね」

“I've bought two **tickets in advance**, so let's come again, okay?”

「玉三郎の美しさにうっとりしちゃったわ」

“I was **fascinated** with Tamasaburo's beauty.”

註) ホテルの場面でただ「シングルの部屋をお願いしたい」という表現なら英語は“I'd like a single room for tonight.”というだけでOKである。ここでは「予約する」(reserve/book)という単語の「場面」を設定している。レストランの場面での「お薦め品」は‘Chef's Special’とも言う。銀行の場面では「くずす」(change)とか「預金をする」(make a deposit)などの用語を次々と覚えさせることである。郵便局の場面で「書留にする」は‘send this by registered mail’と言う表現でもよい。病院の場面で「外来」と「受付」は併せて「外来の受付」(the reception desk for out-patients)として一緒に覚えさせてしまうことである。病名の専門用語は特に自分がかかりやすい病気はよく覚えておくことである。各科の名前ももちろんである。デパートの場面では何をどこで購入できるかが一番問題である。疑問詞の‘where’とか‘which’を用いてあとは品物の名前をどう覚えるかである。また「売り場」を意味する‘corner’とか‘section’とか‘department’などの表現も同時に覚えてもらう必要がある。教室の場面では提出物や試験などに関する表現から興味を抱かせて語彙を増やさせることが大切である。薬局の場面では「処方箋」(prescription) くらいは覚えておかなければいけない語彙の一つである。公衆電話の場面では料金を相手に支払ってもらう「コレクト・コール」(collect call)も同時に語彙の一つに入れておくべきである。歌舞伎座の場面では、特に外国人を案内した時には「能」と「歌舞伎」の違いなども説明できる知識が必要とされる。そういう時もあることを考慮して、学習者には歌舞伎の説明ができるようにと課題を与えて語彙を増やす方法を工夫することも大切である。

以上は10通りほど「場所」の場面の例を列挙したが、それぞれの「場所」における語彙は病院での病名やデパートなどでの商品の名前などは語彙が多くて大変であるが、他の「場所」での語彙はそれほど多くは必要ないであろう。とにかく「場面」による語彙の提示は学習者により多くの興味を与え、最も重要な語彙の教授法と言える。

## 2.2 統語的脈絡場面

日本語と英語の対照的研究の一つとして「修飾語」と「被修飾語」の関係がある。言語類型論 (typology) からすると日本語は膠着語 (agglutinating language) であるので、語順 (word order) という点からすると修飾語 (modifier) がすべて名詞 (noun) または名詞化詞 (nominalizer) の前に配列される。これに対して英語は孤立語 (isolating language) や膠着語の特徴も有しているが主に屈折語 (inflectional language) の特徴が強いので、修飾語 (modifier) が日本語のように単純化されず名詞の前後に配列される。

日本語の成句 (phrase) としての語彙表現を練習させるためには、<sup>ま</sup>先ず何を置いても場面に応じた助詞 (post position) の使用方法を徹底させることが重要である。<sup>たと</sup>例えば「で」という格助詞の練習をするためには、「場面」(situation) として「理由」や「場所」や「手段」などの例を次々と与えて特訓させることである。英語では日本語の格助詞に対照する前置詞 (preposition) を説明しながら、以下に例示するように語構造による場面設定を工夫する必要がある。筆者の Writing の教本『日英語比較対照・英作文演習』(英光社) からの引用を許されたい。

### 統語的場面の設定

名詞：N (noun) 句：P (phrase) 節：C (clause) 飾り：X (modifier)

#### (1) [N] 型

ジョン John 旗 flag ファン fan

註) これらは単純語であるが、日本人がよく間違える発音 (外来語が特に多い) の指導を兼ねて工夫してある。

#### (2) [XpN] 型

ジョンの肖像画 John's **portrait** 新型のファックス a new-type **fax**

ワールドカップ共催問題 the World Cup cohosting **issue**

恒例の皇室園遊会 the annual Imperial Household garden **party**

家具3点 three pieces of **furniture**

註) 同じく外来語の発音に注意を向けている。「意味」という点では「ジョンの肖像画」は極めて曖昧 (ambiguous) である。それは「ジョンが描いた肖像画」(a portrait by John), 「ジョンを描いた肖像画」(a portrait of John), 「ジョンの所有する肖像画」(a portrait of John's) などを意味するからである。この [XpN] 型は日本語も英語も同じである。学生たちには「飾り」(modifier) は必ず名詞の前に置くようにと指示して統語上の場面設定をしている。

「家具3点」の日本語表現に注目していただきたい。語構成という点で詳しく分析すれ

ば、「家具」が被修飾語の名詞 (N) ではなくて、「点」(piece) が被修飾語の名詞 (N) である。それは英語表現の「pieces」を見れば容易に理解されよう。その名詞 (N) は「前飾り」と「後飾り」から成り立っていることが分かる。あえて日本語の表現を変えれば「家具の3点」となる。しかし日本語の表現では「3点の家具をください」とか「3つのラーメンください」などとは言わないで、「家具3点ください」とか「ラーメン3つください」と言うのが普通である。やはり主体である名詞 (N) は「家具」であり「ラーメン」である。したがってこのような名詞の数え方は、数え方の違いがあっても、全部まとめて「修飾語」(modifier) として分析した方が語彙教育として理解しやすい。以下に順次に列挙していくが、太字 (bold letter) の語が覚えさせる主要な語ではなく、語構成という「場面」の設定の中で多種の語彙を覚えさせる教授法である。

### (3) [NXp] 型

#### a) [N+前置詞] 型

アジア出身の人々 **people** from Asia

私の右側にある商品 **goods** on my right side

ブロンドの髪の少女たち **girls** with blond hair

バケツの中の水 **water** in a (the) bucket

註) このような成句の例で気を遣うのは、英語の名詞 (N) は「前飾り」を取らない語構成の場面が設定されているので、冠詞やその他の指示詞などもない複数形か単数扱いの名詞を使用しなければならないことである。多種の例を最低10個以上は用意して学習者たちに示せるように準備し、また彼らに作らせることも重要である。これはこの項だけでなくすべてに言えることである。また冠詞の「a」と「the」がどのような場面でどのような意味化がなされて使用されているのかを同時に学習させることが大切である。

#### b) [N+叙述形容詞] 型

魅力一杯の選手たち **players (athletes) full of** charm

その事故の責任者たち **persons responsible for** the accident

賞賛に値する行為 **acts worthy of** praise

その問題に関連した事項 **matters relevant to** the issue

「2年目のジンクス」を恐れぬ野茂 (投手) **Nomo unafraid of** 'sophomore jinx'

註) これらの名詞も前項と同じく複数形か不可算名詞 (uncountable noun) にする必要がある。フランス語の形容詞とはちょっとニュアンス (nuance) が異なるが、形容詞が名詞の後に来る飾り方には学習者に興味を抱かせることも大切である。さらに重要なことは

上記の例にもあるように of, for, to などのように前置詞とともに共起していることである。これらの語彙は単純語としてでなく、すべて一括して覚えさせることが重要であるのは言うまでもない。

c) [N+現在分詞] 型

アメリカでの交換学生の安全をいぶかる人たち

**people** wondering about the safety of exchange students in the USA

宇宙連絡船内で実験を試みている向井千秋さん

**Chiaki Mukai** carrying out an (the) experiment in the space shuttle

註) 統語上の「場面」とは、すでに名詞を現在分詞で飾る (modify) という環境は与えてあるのだが、たとえば「いぶかる」(wondering about), 「安全」(safety), 「交換学生」(exchange students), 「アメリカで」(in the USA), 「試みる」(carrying out), 「実験」(experiment), 「宇宙連絡船内で」(in the space shuttle) などの語句を括弧でくくって語彙の穴埋め問題にして覚えさせる方法である。冠詞についての説明では「実験」(experiment) の前の「a」と「the」の意味の違い、あるいはよく TOEIC や TOEFL のテストでも出題される「アメリカで」(in the USA) の「the」などの説明も重要である。

d) [N+過去分詞] 型

<sup>せんぱつ</sup><sub>も</sub> 選抜に漏れた選手たち

**players (athletes)** not selected

電子メールで届いた<sup>でんごん</sup>伝言

**messages** sent by email

註) ここでは「選抜に漏れた」(not selected) という過去分詞による飾り (modifier) の簡易さと、「選抜」(selection) や「選抜する」(select) などの派生語 (derivative) も確認されたい。「電子メール」(email/e-mail) は「電子郵便」(electronic mail) の簡約した表現であることも同時に確認されたい。

(4) [NXc] 型

国民から大金をだまし取った官僚たち

**bureaucrats** who swindled a large sum of money out of the people

大リーグ野球の年間新人ヒット記録を更新したイチロー選手

**Ichiro** who set a new rookie record for hits in a single MLB season

註) ここでは節 (clause) が飾り (modifier) の中に登場してくるので必然的に長い語句が誕生する。先ずこの語形を何度も何度も慣れさせて、その中に出現する語彙を片っ端から覚えさせていく教授方法である。官僚 (bureaucrats) というと日本の社会では悪者連中の代名詞みたいになっていてほんとに困ったことであるが、その反対にイチロー選手という名前は日本人の心を明るく癒してくれる。要は学習者に興味あるいは関心を抱くような内容の語句を工夫することが大切である。

### (5) [XpNXp] 型

長野オリンピックで大喝采を受けた日本の選手たち

Japanese **players (athletes)** highly applauded in the Nagano Olympics

国民と共に憲法を遵守していきたいとする天皇の望み

the Emperor's **desire** to abide by the Constitution together with the people

註) この統語関係の「場面」では「前飾り」と「後飾り」によって「名詞」が修飾されるので語句が長くなりやすい。「水の入ったバケツ」(a bucket with water in it) などの場合は短い方である。「天皇」(the Emperor), 「憲法」(the Constitution), 「国民」(the people) などの語彙につく「定冠詞」(the) に注意をむけさせることも大切である。

以上のように「場所」による「場面」と「統語」による「場面」を具体的に列挙し、その都度注釈をのべてきたが、とにかく「場面」の中で語彙力を付けさせる教授法は、言語獲得 (language acquisition) と言語習得 (language learning) の両者において根本的な方法論 (methodology) である。どんな教育も同じであるが、教材をどう創意工夫して学習者に興味あるいは関心を持たせるかが重要なポイントである。

最後に語彙力 (rich vocabulary) と会話力 (speaking ability) の相関関係とその優先性 (priority) という面で論じてみたい。

## 3. 語彙力と会話力の優先問題

鶏と卵の話ではないが、最初から会話ができればそれが一番である。しかしそう簡単には問屋は卸してくれないのである。最初から会話ができるということは最初から統語的文構造を、つまり文法を認識していることになる。果たして事実はそうなのだろうか。これは重要な問題なのでここで詳しく論じさせていただきたい。

### 3.1 語彙の優先性

すでに言語獲得 (language acquisition) に関することで何度か筆者の考察を述べてきてい

るが、幼児が発話するようになるのは文法を理解したからではなく、「場面」(situation) の中で記号 (sign) が意味化するのを知覚できたからである。筆者の造語である SPD を思い出してもらいたい。母国語を幼児が獲得するために最初から文法を教える母親や周囲の人はどこにも存在しないだろう。健康な幼児が毎日耳にする音は、それが母乳とか牛乳とかやわらかいご飯であるなら、母親は「はい、母乳よ」とか「はい、牛乳よ」とか「はい、ご飯よ」などと濁音や拗音からなる難しい発音の表現はあまりしないで、「はい、おっぱいよ」とか「はい、ミルクよ」とか「はい、まんまよ」などというやわらかい表現を好んで聞かせるようにし、「ママ」や「マミー」などの発音にも見られるように [m] 音のやさしいやわらかな響きのある音を用いるので、幼児も「まんま」と言えば何かを食べさせてもらえると思い、まさに「場面」の中で意味化された記号である語彙の一つを認識するようになる。文法などではないことが容易に理解されよう。極端に言うならば、文法を全く知らなくても語彙力さえあればその都<sup>こ</sup>度必要な「場面」で語彙の一つ一つを並べて述べるだけで、聞いている相手は何を言わんとしているかをほとんど理解してくれるであろう。

### 3. 2 語彙力とは

ここで筆者が何を言わんとしているかはすでにお見通しであるかもしれないが、結論的に言えば語彙力 (rich vocabulary) とは視覚的にも聴覚的にも、つまり読解力 (reading ability) も聴解力 (listening ability) も同時に豊かになっていることである。日本に於ける英語教育が成功していないのは読解力だけを重視してきたのが大きな要因である。中学校から英語教育を受けて、最近では小学校からやるように当局から指導がなされているが、年齢を下げれば会話力がつくと思ったら大間違いである。教材の工夫と語学教育の方法論を間違えていなければ、中学校でも高校でもかなりの会話力が達成されるはずである。しかし現状はほとんどダメである。中学、高校、大学、大学院の合計12年間以上やっても日本人の英会話力は中学生以下で、日記も思うように書けず、ましてビジネス用の手紙などはほとんど書けないような卒業生が多いのが現状である。これは受験勉強が主で、語彙力を高めるためのテストも「単語テスト」と称して紙面に書かれたものを視覚的に、つまり読解力というだけで訓練されていることが問題なのである。日頃から授業の度に口頭による書き取りテスト (dictation test) を何度も何度もやっていたら自然と聴解力が身に付いて必然的に会話力も高まって来ると言えよう。その際に英語話者の発音を聞かせてやるようにすればさらに効果的と言えるだろう。要は音声による語彙指導をどう工夫するかの問題なのである。

何度も繰り返して主張したいことは、語彙力 (rich vocabulary) をつけることが会話力 (speaking ability) をつけることと結びつける指導方法が重要なのである。会話力がつくということは必然的に書く能力 (writing ability) も身につけていることを意味する。このように認識するかどうかで語学教育は大きく異なってくるし、教材研究や学校でのカリキュラム問題にも大きく影響してくると言えよう。

## 4. 語彙分類と語彙教育の実践例

語彙力 (rich vocabulary) をつけさせるために学校では様々な試みがなされているにちがいない。何事においてもそうであるが、学習者本人がやる気にならなければどう指導しても望ましい成果は得られないものである。大学へ入学するための受験勉強はかなり熱を入れて勉強するが、いったん入学してしまうと急に勉強意欲はしぼんでしまいアルバイトや遊び事にほとんどの時間を費やしてしまうのが現状である。最後に語彙教育という点で語彙をどう分類するかの問題と筆者の勤める文京学院大学での語彙教育の実践例を述べて本論文を終わりたい。

### 4.1 語彙分類の問題

語彙教育という点で語彙をどのように分類していくかは難しい問題である。まず「**基本語彙**」と「**基礎語彙**」という分類用語がある。前者は語彙の使用度によって1000語とか2000語というように分類したものであるのに対して、後者は日常の生活で多く使用される語彙を分類したものである。この両者の難易度という点では前者の「基本語彙」の方である。それは日常生活という範疇以外に範囲が広がっているからである。したがって語彙教育のための教材も「基本語彙」に関するものが多いと言えよう。

この「基本語彙」の中には当然「基礎語彙」あるいは「生活語彙」なるものが入っている。特に「衣」「食」「住」などに関する語は頻度数は大である。「**語源**」に興味を抱かせて語彙分類をし、同じ形式の語彙をできるだけ覚えさせる方法も語彙教育という点ではかなりの効果がある。ただ語彙数という点ではやはり「基本語彙」による方が効果的であるだろう。どこかに織り交せて項目を設定するのも効果があるかもしれない。「**連語**」(collocation)<sup>(10)</sup>による語彙分類も場面に応じた表現方法を学ぶという面で非常に効果的であると言えよう。統語的な「場面」の環境設定という点でも重要な語彙訓練の一つである。

「**類語**」による分類は意味の分類である以上その範疇が様々な領域に及ぶので簡単にはまとめにくい面がある。これを語の「品詞」から大別すれば「名詞」「動詞」「形容詞」の三分類できる。これはまさに大別であって、これだけでは何が何だか理解しにくい。これをさらに下位範疇へと分類していく作業が必要になってくる。たとえば「衣食住」の「衣」という範疇にしぼってみると、日本語の表現には「**装**」<sup>よそお</sup>、「**身ごしらえ**」<sup>みづくろ</sup>、「**めかし**」「**着付け**」「**若作り**」「**服装**」「**厚着**」「**薄着**」「**和装**」「**洋装**」「**礼装**」「**正装**」「**盛装**」「**略装**」「**着流し**」「**軽装**」「**旅装**」「**男装**」「**女装**」「**武装**」「**扮装**」「**仮装**」「**偽装**」「**変装**」「**改装**」「**新装**」「**着替え**」「**お召し替え**」「**色直し**」「**衣替え**」「**着用**」「**覆面**」「**脱衣**」「**肌脱ぎ**」「**ほおかむり**」「**たすきがけ**」「**下駄履き**」「**わらじばき**」「**ぞうりがけ**」などかなり多くの同じ範疇に属する語彙が存在する。

以上のように語彙を分類することによる「場面」の設定も語彙教育には必要であることを例

示した次第である。

## 4. 2 語彙教育の実践例

最後に文京学院大学での語彙教育の実践例を紹介して本論文を終了したい。本大学ではすでに10数年前から全学生（特に英語が専門である学生）に **Vocabulary Test** を実施してきている。Vocabulary Test 委員会が設置され、筆者がその責任者であるのでその実施経過についてはよく覚えている。現在実施している試験問題から比べると当初の問題はかなり稚拙な感が否めない。というのは、当時は学生たちが試験に備えて勉強できる教本もなく、行き当たりばったりの試験問題であって、そこで出題された語彙が次回に出題される保証もなく、学生たちは毎年2回実施される「語彙テスト」を2年間にわたって合計4回受験しているだけであった。学生たちへの刺激と言え、上位成績優秀者を表彰し学内の掲示板に名前が張り出されたことくらいである。

これではいけないと気づき始めて教本を作成する企画をし、米国人や英国人の教員たちの協力を得てかなりやさしい語彙を入れた合計3000語の「基本語彙」を全部文 (sentence) にした **教本を作成** している。これによって学生たちが勉強する対象物ができたので、常にトップの高得点を獲得する学生などは、今でもその学生の名前が浮かんでくるが、教本のすべてのページが真っ黒になるくらいに勉強していたのである。

さらにその後になって気づいたことは、教本のページ数がやたらと多く、3000語文も番号の1番から3000番までびっしりと並べて印刷してあるだけで、<sup>よほど</sup>余程の勉強意欲がないかぎり積極的にとりかかれない側面を有していたことである。教本の定価もできるだけ安くするために表紙の色くらいは考慮したが、<sup>あじ</sup>味も<sup>そ</sup>素っ<sup>け</sup>気もないものだったのは事実である。

文京学院大学ではかなり以前から全学生に **TOEIC テスト** を実施している。少子化問題が騒がれるようになってから、学生の実力の多様化に合わせて教育方法も多様化する必要が生じ、数年前から新入学生には **ELF (English language foundation)** という必修の教科目を設置し、学生をプレースメント・テスト (placement test) によりクラス分けし、成績は本大学が実施している **TOEIC テスト** と **Vocabulary Test** の成績を加えて<sup>くわ</sup>評価することになっている。学生たちの平均点は必然的に以前より上がったのである。「語彙テスト」が現実的な学生たちの対象となったのが良い結果に結びついたからである。もちろん **ELF** 教科目担当の教員による協力があるのは言うまでもない。

このように語彙力 (rich vocabulary) を学生たちが身につける環境は整備されてきているが、前述のようにもう一つ勉強意欲が盛り上がらない要因があったと思われる。というのは教本の内容が今一つで、どこか物足りない面があったようである。

そこで思いついたのが **TOEIC テスト** を全学生に実施しているのであるから、**教本もそれに関係した内容のものにし**、しかもこれまでの単文形式より**英会話が同時に上達できる会話形式**にすれば学生たちはもっと興味を抱くに違いないということである。それぞれの単語の日本語

訳も付記するように改訂している。さらに3000語文では長すぎるので、基本単語をさらに取捨選択した**2000語文（会話形式だから4000個の単文から成り立っている）の教本**を2年間かけて作成し、昨年から実施できるように漕ぎ着けたのである。学生たちが関心をもったのはいうまでもなく、なんと平均点は大幅にアップ（Up）し、1000点満点の問題で**800点以上の獲得者が一挙に3倍の200名近くにふくれ上がった**ことである。出題問題は以前よりかなり難しいものになっているのに成績は著しく向上したのである。教材による影響が大であることは言うまでもない。さらに学生たちには間違っても次回にできるようになればいよいよと出題方法に工夫をこらしたのもよい結果の要因になっている。構内の掲示板に800点以上の成績優秀者を発表するので、一度名前が張り出された学生は次回も**頑張ろう**と思うようになり、惜しくもわずかの点数で上位にランクされなかった学生は**今度こそと意欲を出す**ようになっているようである。試験日が近づいてくるとキャンパス内のあちこちで教本を開いて勉強している学生たちの姿が多く見られるようになり、駅の構内でも教本を開いているのを見かけたりする機会が最近多くなってきている。

出題方法について説明させていただくと、**100問から成る合計点1000点のテストで、20%は応用問題、50%は教本の新しい範囲**（2000語がそれぞれに会話文になっていて、2年間に4回テストするので1回に500個の語彙が試験範囲になる）、残りの**30%は前回出題した問題**の中からの復習問題、と言うように出題している。しかも**応用問題**は有名な英語誌『TIME』からの出題であるから難しい語彙が多く、英語教員でも読解に骨が折れる問題である。あまりにも難しい語彙については英英辞書的に註を加えて説明するようにしている。

新しい**TOEIC（Part 2）形式の教本**をさらによくするために今年の夏から**CD&CD-ROMの作成作業**が続いている。これはすでに論述しているように、**語彙力（rich vocabulary）**とは視覚的かつ聴覚的なものであって、つまり**読解力（reading ability）**と**聴解力（listening ability）**の両者が伴っていないと**真の語彙力**とは言えない、とする言語理論からの具体的な教材作成の実践例である。学生たちが電車の中でも音声による語彙の勉強が可能であり、学校や家ではPC（personal computer）を用いてCD-ROMによる会話文の読解や聴解訓練が可能になっている。

今後の問題としては、「基本語彙」中心の教本をさらに分類して「場面」を考えた項目別のものにどう改良できるかと、CD-ROMの内容に応用問題などの質問形式をどう加えていくか、などの諸問題の研究が必要になっている。教育は時間と労力とお金がかかるものである。今後も教員仲間の助言と協力を得てより望ましい「語彙教育」を発展させて行きたい筆者の心境を伝え本論を終わりたい。

## 5. おわりに

言語獲得（language acquisition）に一番重要なものは**語彙（vocabulary）**である。それは

言語習得 (language learning) という点でも同じことが言える。本論文では人間が言語獲得に必要な脳細胞の機能は「記号知覚装置」(SPD) をチョムスキーの「言語獲得装置」(LAD) と対比させて考察し、その論理に基づいて「統語レベル」より「語彙レベル」の認識過程が言語獲得だけでなく言語習得でも重要な要素であることを立証した。

さらに「語彙力」(rich vocabulary) をつけるということが必然的に会話力 (speaking ability) をつけることと結びついていることを理論づけた。それは言語獲得の第一段階は「場面」(situation) の中で意味を持った「語彙」を音声的に認識する知覚行為であり、具体的には「単語」(word) は必然的に「文」(sentence) を呼び起こし、それは絶えず「場面」という意味化された環境で生起するものである。その「場面」とは「場所的場面」と語構成という点で「統語的場面」があり、それらの具体例を列挙することで説明を濃いものにした。

最後に語彙教育の問題点を取り上げて論じ、筆者の実践例を提示しながら学生たちへの**望ましい教材作成**がいかに語彙教育に重要かを説明した。「**視覚的**」と「**聴覚的**」な**語彙指導の重要性**を理論的かつ実践的に筆者は示すことができた。さらに教材については今後も研究を重ねる中で改善していく必要を再度述べて本論文のまとめとしたい。

#### (注)

- (1) 分節音 (articulation) とは、人間の話す言葉は実際には連続して音声が聞こえるが、構造上の分析をすると、音素 (phoneme) や形態素 (morpheme) などに分節化が可能である。
- (2) 二重分節 (double articulation) とは、一次的な意味を担う形態素 (morpheme) のレベルの記号がさらに音素 (phoneme) のレベルに分析が可能であることを意味する用語である。
- (3) 単語 (word) の持つ機能は、文法的機能と語彙的機能に分けられる。
- (4) 梶原秀夫 (2000) 「言語教育の重要性について」『紀要33号』文京女子短期大学英語英文学科
- (5) 梶原秀夫 (2001) 「第二言語習得の限界について」『紀要創刊号』文京学院大学外国語学部・文京学院短期大学
- (6) 普遍文法 (universal grammar) という用語は、チョムスキーの「言語生得説」(innateness hypothesis) によって一躍有名になったものである。幼児が母国語を獲得する場合に母親を初めとする周囲の人に文法を特別に教わらなくても、また極めて劣悪な言語データしか与えられないのに、さらに短い期間に母国語を獲得でき、言語獲得の理論からすれば、当然間違はずであるとされる文法事項に対しても間違いがほんの一部でしかないのは、脳細胞に世界の言語を理解する言語機能、つまり普遍文法が働いているからであるという仮説である。
- (7) 梶原秀夫 (1992) 「日英比較対照研究一用語：意味と文について」『紀要25号』文京女子短期大学英語英文学科
- (8) ソシュール (Ferdinand de Saussure) の構造主義的な言語分析は、2項対立法 (dichotomy) による分析方法で有名である。例えば、ラング (langue) とパロール (parole), シニフィエ (signifie) とシニフィアン (signifiant), 通時性 (diachronique) と共時性 (synchronique), そして形相 (forme) と実質 (substance) などがある。本人の著作はほとんど無いが、講義を受けた門弟たちの受講ノートから彼の言語分析がいかに的を射ているかが世に知られるようになった。言語学を文献学から学問たらしめた功績は大で言語学の生みの親である。詳しくは『ソシュール小事典』(大修館) を参照されたい。
- (9) 単純語とはその語形以上に造語的に分析が不可能な語のことである。本、箱、空、山、川など

がその例で、「本」と「箱」を合成させた「本箱」は熟語と呼ばれている。  
(10) 連語 (collocation) 文法的かつ意味的に関連する語が二つ以上に結合して形成する語群を指す用語である。

#### 参考文献

- 『現代言語学辞典』成美堂  
『チョムスキー小事典』今井邦彦編 大修館書店  
『ソシュール小事典』丸山圭三郎編 大修館書店  
朝尾幸次郎 (1985) 『語彙・表現』大修館書店  
梶原秀夫 (2002) 『日英語比較対照・英作文演習』(改訂版) 英光社  
國廣哲彌 (1981) 『意味と語彙』大修館書店  
国立国語研究所 『語彙の研究と教育 (上) (下)』大蔵省印刷局刊  
————— 『分類語彙表』秀英出版  
服部四郎 (1968) 『英語基礎語彙の研究』三省堂  
Roget, P.M. (1971) *Everyman's Thesaurus of English Words and Phrases*. London: Dent  
山並竜一 (2000) 『語源でふえる英単語』The Japan Times